

JANARD

農業・農村開発NGO協議会

ODA政策提言

有機農業をODA農業
支援の中心に

2010.1.15

JANARD

日本農業農村開発
NGO協議会

有機 農業

- ・ 自然農業
- ・ パーマカルチャー

参加型 開発

- ・ PRA/PLA
- ・ 評価法

アドボ カシー

- ・ ネットワーキング
- ・ 政策提言
- ・ 活動広報



提案者

- **米山 敏裕**

(特活)地球の友と歩む会 事務局長

- **池田 晶子**

- (特活)21世紀協会 理事長

- **釜野 徳明**

(特活)日本ケナフ開発機構 理事長

- **野澤 眞次**

(特活)サパ＝西アフリカの人達を支援する会 事務局長

有機・循環型・複合農業とはなにか

- ・ 化学的に合成された肥料・農薬など(合成化学物質)を使わない農業
- ・ 作物生産（多品目）と、畜産・養魚・林産などの生業や、周囲の自然環境および社会とが相互に結びつき、その間で有機物が循環する農業
- ・ 持続的・環境保全型で、生産者・消費者双方にとって安全・安心な農業
- ・ 農家の生計が安定し自立する農業

有機農業に転換すれば…

- 周囲の有機物の有効活用 → コスト安、経営の安定と自立、リスク分散
- 持続的な農業 → 土づくり、輪作・間作・混作、在来品種活用、複合経営
- 安全・安心な農作業

慣行農業

途上国の農民から見た問題

- 経済的負担が重い
- 健康被害がある
- 地力が保てない
- 肥料や農薬が手に入らない
- 経営が自立できない
- 農民のほとんどは零細農民

疑問： 有機農業に関する疑問



疑問１：都市の貧困は悲惨だ。農村はとりあえず食べていけるのだから都市から手をつけるべきでは？

疑問２：有機農業では世界人口を養えない

疑問３：有機農業は労働集約的で大変だ

疑問４：有機質肥料がよいとしても材料がない

疑問５：慣行農法から有機農業への転換は大変で、数年間の減収を免れない、など問題が多い

疑問 1



都市の貧困は悲惨だ。農村は
とりあえず食べていけるのだ
から都市から手をつけるべき
では？

✧ 途上国の75%の貧困人口
が農村に住んでいる (FAO)

疑問2



有機農業では世界人口は養えない

 有機農業は途上国において
近代農法よりも単収が多い
(*C.Badgley et.al. 2007*)

有機農業で世界人口が養える！！

- ・ 米ミシガン大学C. Badgley らが2007年に検証、大きな反響を呼ぶ
- ・ 先進国14カ国（160標本）、途上国39カ国（133標本）において小麦、米、トウモロコシなどの作物別単収比を計算
 - a. 先進国においては「有機農業は慣行農業より単収が7.8%少ない」
 - b. 途上国においては「有機農業は慣行農業より単収が80.2%多い」
 - c. 先進国と途上国を合わせた世界全体では「有機農業は慣行農業より単収が32.1%多い」

疑問 3



有機農業は労働集約的で大変だ。いまさら農民に重労働を課すのか。

✎ パーマカルチャーなど合理的な農法はいくらでもある

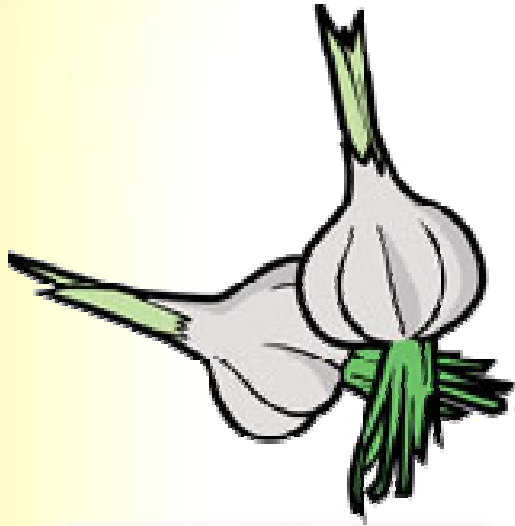
パーマカルチャーとは

- ・ Permanent + Culture (Agriculture) の造語
- ・ 人間にとっての恒久的持続可能な環境をつくり出すためのデザイン体系
- ・ パーマカルチャーには、植物、動物・建物および（水・エネルギー・コミュニケーションなどの）生産基盤などを扱う側面もある



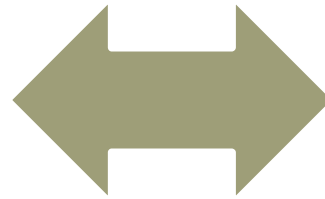
写真左が提唱者
Bill Mollison
(オーストラリア)

パーマカルチャー～害虫の防除



ガーリック

強い香りが、
病原菌を殺菌



野菜全般、ト
マト、ラズベ
リー

香りによって害虫全般を寄せ付けない。特にアブラムシの防除に効果がある他、バラなどの樹皮を食べるキクイムシにも効く。甲虫の防除にも。

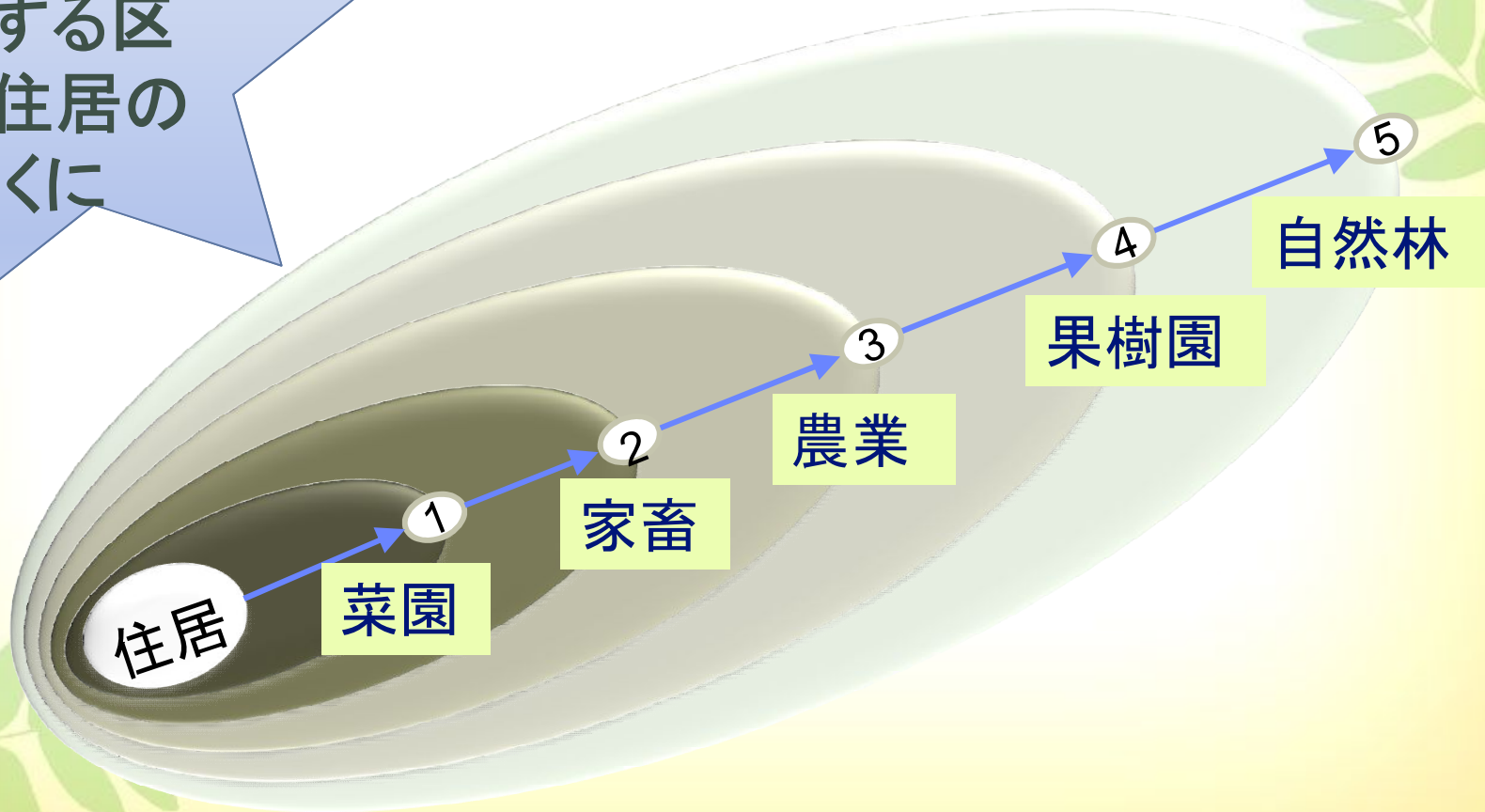
合鴨水稲同自作（合鴨農法）

- ・ 合鴨を水田に入れる
- ・ 合鴨は雑草、害虫を
食べ、糞をし、水を
かき回す
- ・ 水稲は合鴨に刺激さ
れ丈夫になり、分け
つも増える
- ・ 除草は不要、施肥も
最小限
- ・ 収穫は水稲＋合鴨



パーマカルチャー～ゾーニング

より世話を必要とする区画は住居の近くに



パーマカルチャー～水管理

- ・ 水は上から下へ



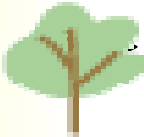
果たして労働集約は 悪いことだろうか？

- 一概に言えない
- 失業率の高い途上国では雇用対策になる
- 人的資源を有効活用することも大切
- 労働の軽減は大事だが、大地の恵みをシェアすることも大切

疑問 4



有機質肥料がいいのはわかる
が材料がない。

 観察と工夫で材料はいくら
でも見つかる。使用できる窒
素分は現在使われている化学
肥料供給分を遙かに上回る

有機質肥料の供給源

- ・ 農場の収穫残渣
- ・ 堆肥
- ・ 厩肥
- ・ マメ科植物

→現状の食料生産を減らすことなく被覆作物、間作作物、緑肥として有機質肥料を供給できる

→有機質肥料は足りてあまりある（足立恭一郎『有機農業で世界が養える』コモンズ、2009、28ページ）



- あらゆる有機物が利用可能
- たとえば油かすに代わり、アブラヤシの絞りかすでぼかしを作る
- 環境の中で循環させる

疑問5



慣行農法から有機農業への転換が大変だ。

 だからといってこのまま慣行農法を継続していてもは土壌が劣化し、食の安全が損なわれ続けるだけ

☆土壌の劣化

- ・ 世界の農地の9割で土壌劣化が起きている
(FAO1999)
- ・ 農業生産能力は年々落ちている
- ・ 食料生産に使える農地が年々減っている(バイオ燃料などに転用)

☆食の安全

- ・ 残留農薬の問題

☆環境の保全

- ・ 収奪型農業からの脱却

では、何が必要か



- ・ アドボカシー
 - 有機農業の必要性
 - ・ 土壌の劣化、食の安全、環境保全
 - 有機転換時の減収を補助する施策
- ・ 技術開発
- ・ 技術の共有化



JANARDの農業に対する考え方



- ・ 有機農業は地球環境の未来、地球住民の健康、地球社会の貧困解消への唯一の答え
 - 地球環境

化学肥料と農薬を使った慣行農法によって土壌劣化が著しく、今後50年の間に農業のできる土地が著しく減少する
 - 健康

化学肥料、農薬が食品に残留し、健康被害が増加。
 - 貧困解消

慣行農法は 投入(生産費用) > 産出(販売収入)のため、貧困農民の生活向上にはつながらない